

『古代アメリカ』15, 2012, pp.51-64

<調査研究速報>

物質文化に表現された自然災害の神話的解釈

—アステカ王国史における 1506 年の大飢饉を事例として—

井関睦美
(明治大学)

1. はじめに

近年、地球規模の環境問題への関心の高まりから、自然災害や気候変動に対する人間の経験や対応に関して、社会・生態システムの脆弱性 (vulnerability) やレジリアンス (resilience 回復力・適応力・危機耐性) といった観点から、様々な研究が行われている [Adger 2006; Enfield 2007, 2012; Ibarra et al. 2010]。環境変化による影響や、環境問題への取り組みは、時代、地域、社会により多種多様である。例えば、標高 2,000m を超えるメキシコ盆地の湖を拠点に繁栄したアステカ王国 (1428-1521 年) では、多くの水害や旱魃などの災害経験をふまえ、堤防や水道橋の建設と改良、耕作地の拡大、食料の備蓄や交換網の拡充、より豊穡な地域への軍事進出など、多くの技術革新、政治・経済システムの改編を繰り返した [Carballal Steadtler and Flores Hernández 2006; Enfield 2012; Hassig 1981; 井関 2012; Raynal-Villasenor 1987]。

アステカ王国は、テツココ湖周辺のテノチティトラン、テツココ、トラコパンという 3 都市による同盟を基盤としていた。その中核的存在であったメシーカ人の都テノチティトランは、湖上の小島を埋め立てて建造された都市国家であった (図 1) (註 1)。文献史料や考古史料からは、度重なる自然災害を通して、戦略的に都市環境を整備し、王国を拡大していった過程が分析できる [井関 2012]。本土と連絡する 5 本の堤道は、雨季や大雨時の都への浸水を防ぐ役割と同時に、堤道に渡された橋を取り外し可能にすることで、カヌーの



図 1 テノチティトランとテツココ湖周辺
(井関 2012: 215 より転載)

往来を容易にし、敵の侵入に対する防御機能も果たした [Carballal Steadtler and Flores Hernández 2006: 164-167; Aguilar-Moreno 2007: 63]。

アステカ王国史において最も大規模な災害は、1440年代後半の気候変動とそれに伴う大飢饉で、メシーカ王朝第5代モテクソマ1世王（在位1440-1469年）の時代に相当する。この大災害により多数の死者や人口流出があったことで、王国は存亡の危機に瀕した。しかし同王の賢策が功を奏し、その後アステカ王国はメキシコ盆地外へと急速に勢力を拡大していった。1449年の大雨により2mの浸水被害に見舞われた際、モテクソマ1世は、洪水対策としてテツココ湖を縦断する16kmもの長さの堤防の建造を命じた [Raynal-Villasenor 1987: 7-8; Carballal Steadtler and Flores Hernández 2006: 167]。また同王は、1452年から2年間続いた旱魃により発生した大飢饉の経験から、継続的な真水の確保をより安定化させるために、第3代チマルボボカ王（在位1415-1426年）が本土のチャフルテペクの森から堤道沿いに引いた水道橋に、予備の通水樋を追加する改造工事も行っている [Chimalpain 2003: 89; Raynal-Villasenor 1987: 6]。大飢饉は、メキシコ盆地の収穫量の限界を認識する契機となり、その後王国は、メキシコ湾岸地域など旱魃の影響の無い豊かな地方への侵攻や、王国の支配領域と遠距離交換網の拡大に注力した [Berdan and Anawalt 1997: 17; Davies 1973: 91-99; Hassig 1988: 163-165; Smith 2003: 49-50]。メキシコ盆地内では、それまでテツココ湖北部のシャルトカン湖とツォンパンコ湖に限定されていたチナンパ（泥土を積み上げ造成した湖上の耕作地）を、堤防と堤道で水位を調節することで、南部のショチミルコ湖とチャルコ湖にも展開し、農作物の収穫量を飛躍的に増大させた [Aghajanian 2010: 90; Berdan 2005: 26-27; Palerm 1973: 237]。この事例は、災害に直面した際の「世界」の脆弱性の認識と、それに対するレジリアンスの発揮法の一例を示している。

一方、第8代アウィツォトル王（在位1486-1502年）は、主都の人口増加に伴う飲料水の供給不足解消のため、1499年に湖南部の都市国家コヨアカンの水源から地元の反抗に遭いながらも水道を引くが、送水量が制御不能となり、大洪水を引き起こしてしまった [Códice Chimalpopoca 1992: 58; Raynal-Villasenor 1987: 7]。このように環境整備の試みは、必ずしも常に成功するわけではなく、人工的な災害につながる可能性も含んでいる。

レジリアンスは、技術改革や政治・経済戦略面だけで発揮されるものではない。災害という不可抗力の事態に直面した社会は、精神的なダメージも乗り越える必要がある。モテクソマ1世は、自然災害を神話的文脈に取り込み、大規模儀礼として民衆に経験させることで、被災経験を民族史上の一つの神話物語としてアステカ社会に共有させた [井関 2009, 2012]。本稿では、自然災害に対する共同体の解釈と表現の一例として、モテクソマ1世の曾孫にあたる第9代モテクソマ2世（在位1502-1520年）が、災害の経験をどのように伝統に取り入れ、社会的共有を目指したのかを物質文化の視点から分析する。物質文化には、儀礼やモニュメントといった顕在化された文化的思想が含まれるものとする [Izeki 2008: chap. 4]。まず2章では、アステカの神話・宗教観と、モテクソマ1世と2世が改編した大規模儀礼について概観する。3章では、モテクソマ2世の治世に起こった大飢饉に関連すると考えられる記念碑的の石像彫刻を挙げ、その意味と機能を考察する。4章では、自然災害の文化的経験についての論考をまとめる。

2. 自然災害の神話的文脈への取り込み

アステカ王国史における旱魃、洪水、冷害、地震、日蝕、彗星の出現などの天変地異は、先スペイン期様式の絵文書や植民地時代の文献に数多く記録されている [Alva Ixtlilxóchitl 1977; Chimalpain 2003; Durán 1995; Quiñones Keber 1995; Sahagún 1953-81]。なかでも前述した 1450 年代の大災害については詳細な記録があり、これらの史料を元に、気候変動の歴史や災害の社会的影響に関する研究がなされてきた [Florescano ed. 1980; Florescano and Swan 1995; O'Hara and Metcalfe 1995; Enfield 2007; Stahle et al. 2011; Therrell et al. 2004]。この一連の災害の被害がもっとも大きかった年はアステカ暦では「1 の兎」の年に相当し、「災厄の年」の象徴として認識されていた。以下では、アステカ暦の背景となる神話・宗教観、モテクソマ 1 世と 2 世による神話的文脈での災害の位置づけを具体的に描写する。

2-1. アステカの暦と神話

アステカ暦では、260 日周期の祭祀暦と 365 日周期の太陽暦が並行利用され、太陽暦の 52 年で 2 つの暦が一巡するように計算されていた [Sahagún 1953-81: Book 7, The Calendar Wheel]。52 年の各年は、4 種類の絵文字（兎、葦、ナイフ、家）と 1～13 の数字の組合せで表現された。各日は、20 の絵文字（年を表す 4 種類を含む）と 1～13 の数字で組み合わせられ、祭祀暦を形成していた。それぞれの暦年や暦日は、神話上のエピソードや神々の誕生年などと結びついている。

1 の兎の年は、災厄をもたらす年とみなされていた [Sahagún 1953-81: Book 7, 21-24]。しかし実際に 1 の兎に飢饉をもたらしたのは、前年の「13 の家」の旱魃であった。882 年から 1558 年の間に巡ってきた 13 回の 13 の家の年を対象とした年輪気候学の研究でも、すべての年で、平均値を著しく下回る年輪幅指数が検出され、旱魃があったことが科学的にも証明されている [Therrell et al. 2004]。一方、1 の兎は 52 年周期の最初の年に当たり、メキシコ中部一帯では、地域または各都市で、伝統的に暦のリセット行事である「年を束ねる儀礼」が行われる重要な年でもあった [Códice Chimalpopoca 1992: 4-5; Hassig 2001: chap. 2; Sahagún 1953-81: Book 7, 23] ¹⁾。

アステカの神話によると、現在の太陽が誕生するまでに、4 つの太陽が存在した。それぞれの太陽の寿命は、第 1 の太陽が 676 年、第 2 の太陽が 374 年、第 3 の太陽が 312 年、第 4 の太陽が 676 年、というように 52 年の倍数年であった [Códice Chimalpopoca 1992: 119]。現在の第 5 の太陽は聖なる火から誕生したが、最初に東の空に上った後、微動だにしなかったため、神々全員がその命を捧げ、太陽に軌道を描く力を与えた [Códice Chimalpopoca 1992: 121-122; Sahagún 1953-81: Book 7, 3-8]。この太陽も、52 年ごとに消滅の危機を迎えると考えられた。

1 の兎の翌年にあたる 2 の葦は、最高神の一人であるテスカトリボカが聖なる火を焚き、太陽に捧げる生贄（捕虜）を獲得するために戦争を制度化した年である [Códice Chimalpopoca 1992: 120; Garibay 1985: 33-37]。太陽の動きは時間の流れと世界の存続を意味し、太陽の運行を維持するためには、神々が命をなげうったように、人間も生贄として命を捧げ続けなければならない。そして生贄の確保のためには戦争で戦うことが必要である。2 の葦は、このような戦闘的な太陽信仰を神話的に象徴する暦年であった [井関 2012: 219]。

テノチティランの主神殿に祀られたメシーカの守護神ウィツィロボチトリは、戦争と太陽を司

る神でもあり、アステカ軍が戦闘で確保した捕虜の心臓を日々捧げることで、太陽の運行が保証され世界が維持されると信じられていた [Carrasco 1998: 56]。

2-2. 1の兎の大早魃と大規模儀礼の再編

モテクソマ1世の治世は、1428年に結成されたテノチティトラン、テツココ、トラコパンによる三都市同盟（アステカ王国）がテツココ湖周辺をほぼ支配下に治め、メキシコ盆地外への侵攻を本格化した王国拡大期である。同王は、テノチティトランの主神殿を大幅に拡張し、戦勝記念や神々への奉納品として大規模な石像彫刻を建造することで、メシーカの支配力を民衆や周辺諸国に対して積極的にアピールした [Durán 1995: chaps. XVI, XXXI]。アステカ王国史上、伝説的な存在として神格化された最初の王であり、栄光の時代を象徴する人物である [Alvarado Tezozómoc 1992: 94-95]。

モテクソマ2世は、スペイン人到来前のアステカ王国を統治した、実質的にはメシーカ王朝最後の王である。優れた戦士でもあった同王は、1502年の即位直後から多くの戦いで勝利を収め、アステカ王国の絶頂期を築き上げた [Durán 1995; Hassig 1988: 219-235; Sahagún 1953-81: Book 8]。同王は自身を神格化し、宮廷内でも自分の顔を直視することを許さなかったと伝えられている [Durán 1995: chap. LIII; McEwan and López Luján 2009: 22]。

モテクソマ1世と2世が経験した共通の歴史的事件として、大早魃と52年周期の「年を束ねる儀礼」が挙げられる。モテクソマ1世は、1454年の1の兎が大飢饉の年であったため、この儀礼を翌年の2の葦に延期した [Chimalpain 2003: 89; Hassig 2001: 45-47; Izeki 2008: 94; Quiñones Keber 1995: 67-68, 216-218]。1454年の規模には及ばないが、52年後の1506年も災害と飢饉に見舞われた。異常気象は数年前から始まり、1503年には大雪、1505年からは大飢饉が始まり、1506年にはネズミの異常発生もあり、多くの死者と主都からの人口流出が記録されている [Quiñones Keber 1995: 86-87, 228-9]。この災害を機に、モテクソマ2世は先代王が失敗した水道橋の修復に着手するが、スペイン人の到来により完成には至らなかった [González Rodríguez 2009; Pineda Mendoza 2000: 25-26]。

モテクソマ2世の年を束ねる儀礼も、1の兎（1506年）の大飢饉を理由に、2の葦（1507年）に延期された [Quiñones Keber 1995: 86, 229]。

年を束ねる儀礼は「新しい火の儀礼」とも呼ばれ、元々暦の一巡を記念して、過ぎ去った時間を表す52本の葦または木の束を作り、新たに火をおこす地域共同体レベルの祭儀であった [Izeki 2008: 92-93]。しかし1507年の記録では、儀礼はウィツィロポチトリを祀る月に、以下のように大々的に開催された [Códice

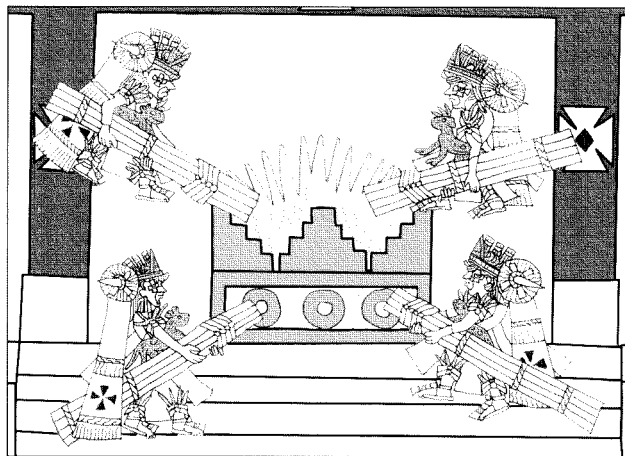


図2 「年を束ねる儀礼」で年の束を神殿の聖なる火にくべる神官たち (Códice Borbónico: 34) 井関による描画

Borbónico 1991: 34; Sahagún 1953-81: Book 7, 25-30]。まず町中の火を全て消し、真夜中の「星の丘（シトラルテペトル *citlaltepetl*）」の頂上で火の神官が新しい火を点し、その火に生贄を捧げた。新しい火は主都の神殿の聖なる火鉢に運ばれ、ウィツィロポチトリの神像の前で、戦士の死装束に身を包んだ「火の神官」たちが 52 年の束を火鉢で燃やした（図 2）。新しい火は、主都に招集された支配下諸都市の代表者によって、各都市の主神殿の火鉢に運ばれ、庶民の各家庭にも配られた。1455 年の儀礼の様子に関しては詳細な記録は無いが、同じ「星の丘」で儀礼が行われたという描写があることから、1507 年に近い規模の大きさと開催されたと考えられる [Chimalpain 2003: 121; Hassig 2001: 45-47; Izeki 2008: 94]。

年を束ねる儀礼の開催時期の変更には、以下の 3 つの機能と意味がある [Izeki 2008: 96-97]。第 1 に、暦の周期を記念する地域的な伝統儀礼を、支配下諸都市を巻き込んだ国家レベルで統括し、王国の宗教的指導力を発揮する。第 2 に、神話的に戦争を象徴する「2 の葦のウィツィロポチトリの祭礼月」に儀礼を行い、生贄を必要不可欠とする太陽信仰と戦争の結びつきをより強固にした。そして第 3 に、物理的に古い時代（太陽）を木の束にして「茶毘に付し」、新しい火から新しい時代（太陽）を創造し、支配下諸都市に新しいメシーカ産の時間を分配することで、政治的な影響力をも示す。つまり大災害の経験は、アステカ神話を再生した伝統儀礼で昇華され、大衆がメシーカ王の宗教的・政治的影響力をあらためて認識する形で共有されたのである。

3. 1507 年の「年を束ねる儀礼」を記念した石像彫刻

主都の祭祀地区の建造物は、主神殿テンプロ・マヨールの神殿拡張段階（全 7 期）を基準に年代特定され、遺物や遺構の発掘地点からどの王の治世に相当するか推測できる。地盤沈下の影響で初期の建造物は水没しており、一方でスペイン人による破壊の激しい王国史後期ほど祭祀地区の残存率は低い [Hinojosa Hinojosa 1999; López Luján 2005, 2006]。建造物や遺物の残存度ももっとも高いのは、第 4 代イツコアトル（在位 1428-1440 年）から第 6 代アシャヤカトル（在位 1469-1481 年）の時代のみである。モテクソマ 2 世に関しては、文献史料には多くの記述があるにも拘らず、考古史料は相対的に非常に少ない。

石像彫刻は、美術様式と出土地で年代特定ができる。しかし主神殿の学術調査が正式に始まる 1978 年以前に出土した遺物は、詳細な記録が無いまま博物館に収納されたり、欧米の個人コレクションに入るケースもあり、コンテクストの不明な遺物が多い。第 7 代ティソック（在位 1481-1486 年）以降の王は、それぞれの王のシンボルと暦を刻んだ彫像や図像を多く残しており、それに基づき、少なくともその石像が関連している年代と神話的・歴史的事象は特定できる [Pasztor 1983]。とくにモテクソマ 2 世は、自身の業績をモニュメントで一般にアピールすることに執着していたという記述もあり、同王のシンボルが刻まれた石像彫刻は多数記録されている [Durán 1995: chap. LXVI; McEwan and López Luján eds. 2009]。

本稿では、1506 年の大飢饉と 1507 年の年を束ねる儀礼に明らかに関連していると考えられている石像モニュメントを 3 点（テンプル・ストーン、火のへび、年の束）挙げ [Pasztor 1983: 165]、その機能と意味を考察する。

3-1. テンプル・ストーン (英 *Temple Stone* / ナワトル語 *Teocalli*)

テンブル・ストーンは、神殿ピラミッド型の石像彫刻である [Alcina Franch et al. eds. 1992: 236-239; McEwan and López Luján eds. 2009: 176-179; Pasztory 1983: 167] (120×92×99cm. 図3)。1926年に、モテクソマ2世の宮殿跡(現・国立宮殿)から出土した。底面以外の全ての面に彫刻が施されている。正面階段の両脇には、左側に1の兎、右側に2の葦という暦年が彫刻されている。頂上の神殿部分正面には、「第5の太陽」を中心に、左にメシーカの守護神であり戦争と太陽の神でもあるウィツィロポチトリ、右にテスカトリポカ神(聖なる火を焚き戦争を制度化した神)の姿をしたモテクソマ2世が描かれている。太陽の刻まれた神殿正面に対して垂直に位置する階段最上段には、生贄を要求する大地の神トラルテクトリ、神殿部の頂上には、テノチティラン建国の年である2の家(1325年)と生贄の象徴である草のボールが刻まれている(図4)。神殿部の側面には、左側に1のナイフ(ウィツィロポチトリの祝祭日)、右側に1の死(テスカトリポカの祝祭日)という暦日が記されている [Sahagún 1953-81: Book 4, 33, 77]。両方とも、戦争のモチーフである「火と水」

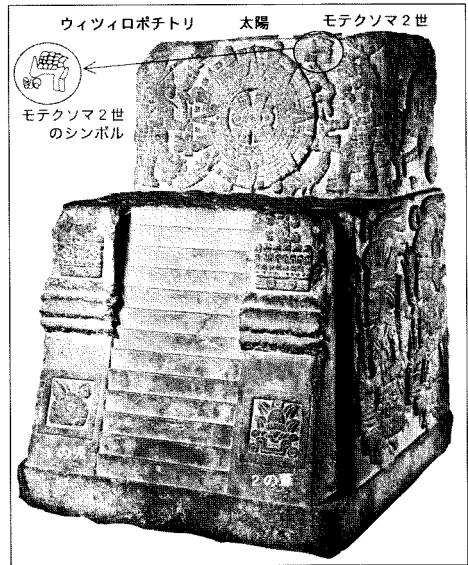


図3 テンプル・ストーン メキシコ国立人類学博物館蔵 (McEwan and López Luján eds. 2009: 177 より転載)

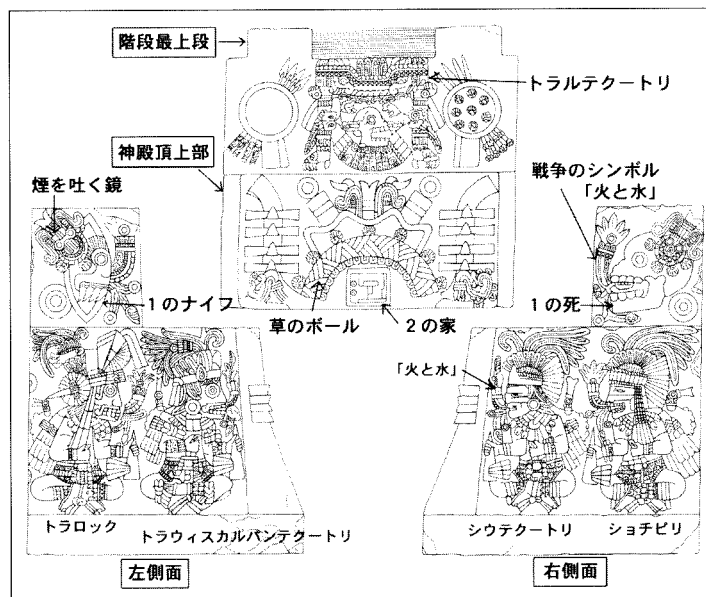


図4 テンプル・ストーンの詳細 (Alcina Franch et al. eds. 1992: 238 を改編)

の凶像とテスカトリボカの属性を表す「煙を吐く鏡」で装飾されている(図4)。ピラミッド部分の側面には、雨の神トラロック、火の神シウテクトリ、金星の神トラウイスカルパンテクトリ、花の神ショチピリ、という4人のアステカの主要な神々が「火と水」を口から発している様子で描写されている。背面には、テノチティトランのシンボルである「サボテンの上に留まるワシ」が戦争や生贄のモチーフと共に描かれている(図5)。

この石像彫刻は、大飢饉の年である1の兎、縄で結ばれた2の葦、モテクソマ2世のシンボルが表現されていることから、1507年の年を束ねる儀礼を記念して作成されたと考えられている[Alcina Franch et al. eds. 1992; McEwan and López Luján eds. 2009; Pasztory 1983]。テノチティトランのシンボルや建国年、太陽、繰り返し描写される戦争のモチーフ、太陽信仰と戦争に関連するウィツィロポチトリとテスカトリボカの凶像、「火と水」を伴った4人の神々などを総合すると、「太陽(ウィツィロポチトリ)として神格化されたメシーカ王が率いるテノチティトランの戦争での勝利」を表現しているとも解釈できる。

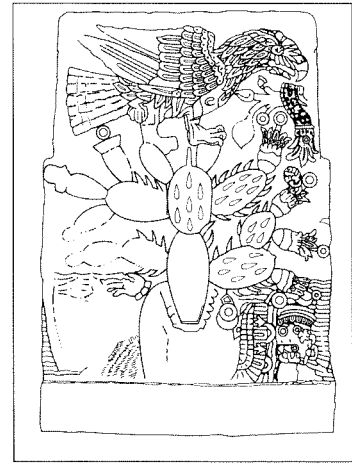


図5 テノチティトランのシンボル (Alcina Franch et al. eds.1992: 239 より転載)

3-2. 火のヘビ (ナワトル語: シウコアトル *Xiuhcoatl*)

火のヘビは神話上の動物で、天空の火(流星や稲妻)の象徴や、太陽の軌道を具現化した姿でもあり、神話上ではウィツィロポチトリの武器としても登場する[Garibay 1985: 69; Izeki 2008: chap. 6; Sahagún 1953-81: Book 3, 1-5]。また、ナワトル語(アステカの言語)で「シウ *xiuh*」という語幹は、火、年、草、トルコ石など多様な意味を含んでおり、「年を束ねる儀礼 (*toxiuhmolpilia*)」の名称にも含まれている。シウコアトルは、この複雑な観念を体現した存在とも言えるだろう[Izeki 2008: chap. 5]。



図6 火のヘビ ダンバートン・オクス蔵 (McEwan and López Luján eds. 2009: 174 より転載)

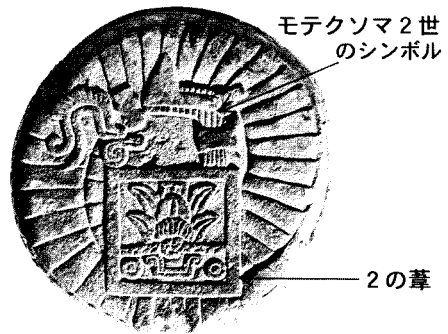


図7 火のヘビの底面
モテクソマ2世のシンボルと2の葦 (Pasztory 1983: 252 より転載)

この石像彫刻は頭部が欠けているが、とぐろを巻いたへびの姿を表現している。昆虫のような体節の中に星を象徴する円形モチーフが並ぶ胴体や、かぎ爪、太陽光を表す三角形の尾などからシウコアトルと特定できる [Alcina Franch et al. eds. 1992: 198 McEwan and López Luján 2009: 174; Pasztory 1983: 252] (43.5×45.5cm. 図6)。底面には、モテクソマ2世のシンボルと2の葦の暦年が彫刻されている (図7)。2の葦は縄で縛られており、テンプル・ストーンと同じ様式で描かれている。この火のへびは、ウィツィロポチトリの武器として「戦争」という属性を表現すると共に、天空で軌道を描くことで時間(年)を産み出す太陽への信仰も表している。1507年の年を束ねる儀礼における、戦闘的な太陽信仰を強調したモニュメントと考えられる。

3-3. 年の束 (ナワトル語: シウモルピリ *xihmolpilli*)

年を束ねる儀礼の2ヶ月後、地母神シウコアトル *Cihacoatl* と死者を祀る祭礼のなかで、年の束は太陽神のために戦場で命を落とした戦士と同じ死装束で包まれ、生贄の頭蓋骨を並べる祭壇を模した石製の祭壇 (ツオンパントリ *tzompantli*) に葬られた [Códice Borbónico: 1991: 36] (図8)。実際、石製の年の束は、テノチティトラン祭祀地区のツオンパントリから複数個出土しており、この石彫もそのうちのひとつと考えられている [Caso 1967: 134] (図9)。これは52本の年の束で、中央

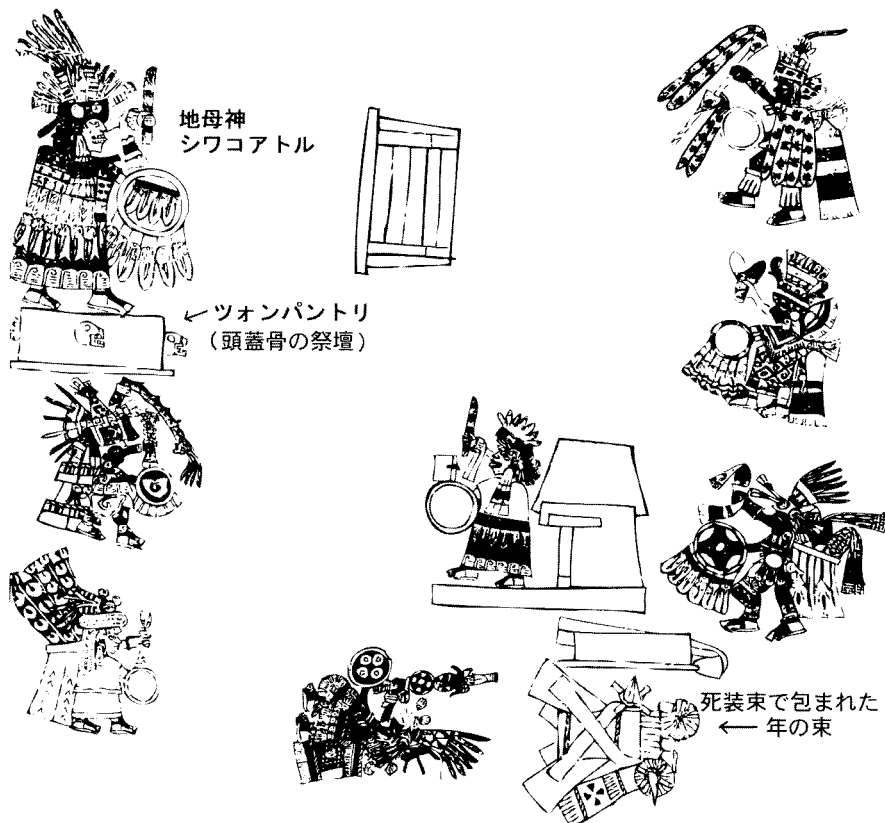


図8 年の束のツオンパントリ (頭蓋骨の祭壇) への埋葬儀礼
(Códice Borbónico 1991: 36) 井関による描画

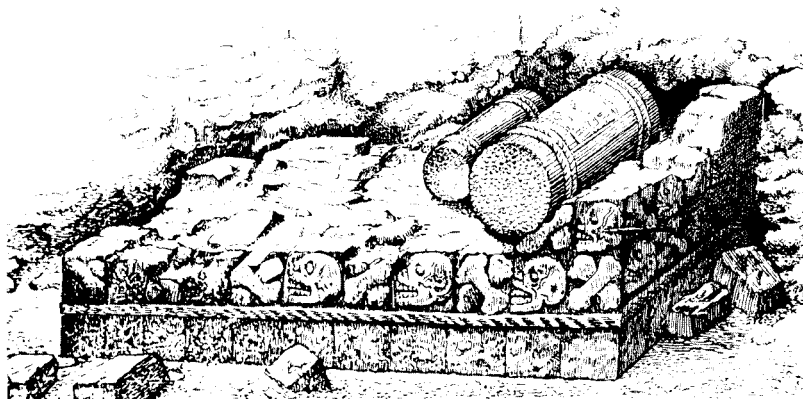


図9 年の束が埋葬されたツオンパントリ (Caso 1967: 135より転載)



図10 年の束の「1の死」(左端)と「2の葦」(中央) メキシコ国立人類学博物館蔵 (Nicholson with Quiñones Keber 1983: 43より転載)

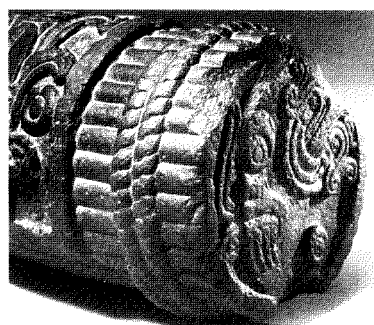


図11 年の束の「1のナイフ」 (Nicholson with Quiñones Keber 1983: 45より転載)

に2の葦、両端に1のナイフと1の死という暦日が刻まれている(直径26×61cm、図10、図11)。2つの暦日は、テンプル・ストーンと同じ美術様式で、戦闘的な太陽信仰を象徴する戦争のモチーフ「火と水」と煙を吐く鏡で装飾されている。この石像彫刻も1507年の年を束ねる儀礼を記念して製作され、地母神の儀礼の際にツオンパントリに埋葬されたものと考えられる [Izeki 2008: 95; Nicholson 1983: 43-45]。

3-4. 考察

これら3つの石像彫刻は、詳細な出土状況や出土地点は不明であるが、1507年の年を束ねる儀礼とアステカの太陽信仰を融合した記念碑であることは明らかである。暦に関する伝統儀礼が、災害を機に、アステカの戦闘的政治思想を正当化する儀礼へとすり替えられた具体例と言えよう。テンプル・ストーンは王宮から出土しており、年の束の石彫も儀礼で使用された可能性が高いことから、少なくともこの2つの彫像は祭祀地区に出入りする人々には目にされ、メシーカ支配層の思想を共有する機能を果たしただろう。

4. おわりに

自然災害の経験には、社会階層の差や、敵・味方などの社会的立場の相違はほとんど影響しない。戦士や戦場にコンテキストが限定される戦争のように、被害の程度に個人差が出る事例とは異なり、共同体の構成員全員がほぼ同程度に被災することが特徴である。そのため、とくに支配層にとっては、災害を神話に取り込み、顕在化させる（モノメント化する）ことで、社会的に環境認識を再編し共有する契機となりえる。この場合「環境」とは、その共同体にとっての「世界」とも置き換えられるだろう。

神話は世界の創造を物語り、物質文化がそれを顕在化させる [井関 2010]。アステカ神話では、世界を司る太陽は 52 年ごとに危機を迎える。52 年周期で巡ってくる 1 の兔の災厄の年は、他の時期に起こる災害よりも、アステカ社会に世界の終わりを強く意識させていた可能性もある。翌年の 2 の葦に太陽の再生儀礼をすることは、生と死が循環的な時間観念を持つ社会にとっては理にかなった行為であろう。そして 52 年一度しか経験できない儀礼を、モノメントとして具現化し公共の場に展示することで、共同体レベルで再編された神話的観念を日常的に繰り返し確認できる。この一連の文化的理解のプロセスは、環境変動に対する文明社会のレジリアンスの一つと言えるだろう。

【謝辞】

本稿は、平成 21-25 年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（領域代表：青山和夫）の成果の一部である。

註

- (註 1) 三都市同盟（アステカ王国）の三都市とは、メシーカ人のテノチティトラン、アコルワ人のテツココ、テパネカ人のトラコパンを指す。その影響力の強さから、本稿では、「アステカ王国」は、おもにテノチティトランおよびメシーカ王朝を指すこととする。また「アステカの暦・神話」も、メシーカに関する史料記録をベースとした文化要素の総称とする。
- (註 2) いくつかの植民地時代に編纂された絵文書には、メシーカの民族史では古くから 2 の葦に年を束ねる儀礼をしていたという記録がある [Berdan and Anawalt 1997; Códice Boturini 1952]。しかし、テンプル・ストーンに 1 の兔と 2 の葦が両方記されており、伝統的な暦の始まりを意識しながらも「変更」を強調する描写が観察できることなどから、アステカ王国時代（三都市同盟結成後）に変更された儀礼の開催年を伝統とみなした、植民地時代の歴史編纂上の混乱という解釈が主流である [Hassig 2001: chap. 4; Izeki 2008: chap. 8; Sáenz 1967: 16]。災害や戦争などの事情から、やむを得ず 2 の葦に変更した場合もあるかもしれないが [Tena 1987 chap. X]、考古学的には確認する方法は無い。またその時代は、まだ共同体レベルでの開催であるため、周囲に対する政治的・宗教的影響力は問題にならないと考えられる。

引用文献

- Adger, W. N.
2006 Vulnerability. *Global Environmental Change*, 16: 268-281.
- Aghajanian, A.
2010 *Chinampas. Their role in Aztec Empire-Building and Expansion*. IndoEuropeanPublishing.com.
- Aguilar-Moreno, M.
2007 *Handbook to Life in the Aztec World*. Oxford University Press, Oxford and New York.
- Alcina Franch, J., M. León-Portilla, and E. Matos Moctezuma, eds.
1992 *Azteca-Mexica*. Sociedad Estatal Quinto Centenario, México.
- Alva Ixtlilxóchitl, F.
1977 *Obras Históricas*. Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Alvarado Tezozómoc, F.
1992 *Crónica mexicáyotl*. Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Berdan, F. F.
2005 *The Aztecs of Central México. An Imperial Society*. Second edition. Thomson Wadsworth, Belmont, CA.
- Berdan, F. F. and P. R. Anawalt
1997 *The Essential Codex Mendoza*. University of California Press, Berkeley.
- Carballal Steadtler, M., and M. Flores Hernández
2006 Hydraulic Features of the Mexico-Texcoco Lakes during the Postclassic Period. In *Precolumbian Water Management. Ideology, Ritual, and Power*, edited by L. J. Lucero and B. W. Fash, pp. 155-170. The University of Arizona Press, Tucson.
- Carrasco, D., with S. Sessions
1998 *Daily Life of the Aztecs. People of the Sun and Earth*. Greenwood Press, Westport and London.
- Caso, A.
1967 *Los calendarios prehispánicos*. Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Chimalpain, D.
2003 *Séptima Relación de las diferentes historias originales*. Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Códice Borbónico
1991 *Códice Borbónico*. introduction and explanation by F. Anders, M. Jansen, and L. Reyes García. Sociedad Estatal Quinto Centenario, Spain; Akademische Druck- und Verlagsanstalt, Austria; Fondo de Cultura Económica, México.
- Códice Boturini
1952 *Códice Boturini*. interpreted by J. Fernando Ramírez. Biblioteca de Historiadores Mexicanos, Editor Vargas Rea, México.
- Códice Chimalpopoca

- 1992 *Códice Chimalpopoca*. translated by P. Feliciano Velázquez. Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Davies, N.
1973 *The Aztecs*. University of Oklahoma Press, Norman.
- Durán, D.
1995 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de la Tierra Firme*. Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, México.
- Enfield, G. H.
2007 Archival explorations of climate variability and social vulnerability in colonial Mexico. *Climatic Change*, 83: 9-38.
2012 The resilience and adaptive capacity of social-environmental systems in colonial Mexico. *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 19(10): 3676-3681.
- Florescano, E., ed.
1980 *Análisis Histórico de las Sequías en México*. Comisión del Plan Nacional Hidráulico, México.
- Florescano, E. and S. Swan
1995 *Breve Historia de la Sequía en México*. Biblioteca Universidad Veracruzana, México.
- Garibay, A.M.
1985 *Teogonía e historia de los mexicanos*. Editorial Porrúa, México.
- González Rodríguez, C. A.
2009 Water Supply Works in Ancient Mexico City. Origin of a Majestic Civilization. Paper presented in Proceedings of the 33rd IAHR Congress, Vancouver, BC, Canada.
- Hassig, R.
1981 The Famine of One Rabbit: Ecological Causes and Social Consequences of a Pre-Columbian Calamity. *Journal of Anthropological Research*, 37: 172-182.
1988 *Aztec Warfare*. University of Oklahoma Press, Norman and London.
2001 *Time History and Belief in Aztec and Colonial Mexico*. University of Texas Press, Austin.
- Hinojosa Hinojosa, J. F.
1999 Hundimiento del Centro Histórico de México-Tenochtitlan. *Creación & Cultura. Revista Internacional de Arquitectura, Artes, Diseño* 1(2):23-34.
- Ibarraran, M. E., E. I. Malone, and A. L. Brenkert
2010 Climate change vulnerability and resilience: current status and trends for Mexico. *Environmental Development Sustainability* 12: 365-388.
- 井関睦美
2009 「アステカ帝国と周辺諸民族との関係—中心と周辺の視点から」 浅香幸枝編『地球時代の多文化共生の諸相』 pp. 219-238. 行路社.
2010 「アステカ王国拡大期におけるコヨルシャウキ女神の凶像変化」『古代アメリカ』13: 41-52.
2012 「アステカ王国史における自然災害と環境認識の変容」『第四紀研究』51(4):215-222.
- Izeki, M.

- 2008 *Conceptualization of 'Xihuilitl': History, Environment and Cultural Dynamics in Postclassic Mexica Cognition*. BAR International Series 1863. Archaeopress, Oxford.
- López Luján, L.
- 2005 *The Offerings of the Templo Mayor of Tenochtitlan*. Revised Edition, translated by B. R. Ortiz de Montellano and T. Ortiz de Montellano. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- 2006 *La Casa de las Águilas. Un ejemplo de la arquitectura religiosa de Tenochtitlan*. 2 vols. Consejo Nacional para la Cultura y las Artes and Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.
- McEwan C., and L. López Luján
- 2009 Introduction. In *Moctezuma. Aztec Ruler*, edited by C. McEwan and L. López Luján, pp. 18-23. The British Museum Press, London.
- McEwan C., and L. López Luján, eds.
- 2009 *Moctezuma. Aztec Ruler*. The British Museum Press, London.
- Nicholson, H. B., with E. Quiñones Keber
- 1983 *Art of Aztec Mexico. Treasures of Tenochtitlan*. National Gallery of Art, Washington, D. C.
- O'Hare, S. L. and S. E. Metcalfé
- 1995 Reconstructing the climate of Mexico from historical records. *The Holocene*, 5(4), 485-490.
- Palerm, A.
- 1973 *Obras hidráulicas prehispánicas en el sistema lacustre del Valle de México*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.
- Pasztory, E.
- 1983 *Aztec Art*. Harry N. Abrams, New York.
- Pineda Mendoza, R.
- 2000 *Origen, vida y muerte del acueducto de Santa Fe*. Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Quiñones Keber, E.
- 1995 *Codex Telleriano-Remensis*. University of Texas Press, Austin.
- Raynal-Villasenor, J.A.
- 1987 The remarkable hydrological works of the Aztec civilization. In *Water for the Future: Hydrology in Perspective*. (Proceedings of the Rome Symposium, April 1987) International Association of Hydrological Sciences, no. 164: 3-9.
- Sáenz, C. A.
- 1967 *El fuego nuevo*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.
- Sahagún, B.
- 1953-81 *Florentine Codex*, translated by A. J. O. Anderson and C. E. Dibble. 12 Books. Monographs of the School of American Research, Santa Fe.
- Smith, M. E.
- 2003 *The Aztecs*. Second edition. Blackwell, Malden, MA, Oxford, UK, and Victoria, Australia.
- Stahle, E. W., J. Villanueva Díaz, et al.

- 2011 Major Mesoamerican droughts of the past millennium. *Geophysical Research Letters*, 38: 1-4.
Tena, R.
- 1987 *El calendario mexica y la cronografía*. Instituto Nacional de Antropología e Historia, México.
- Therrell, M. D., D. W. Stahle and R. A. Soto
- 2004 Aztec Drought and the “Course of One Rabbit”. *American Meteorological Society*, 85(9): 1263-1272.

原稿受領日 2012年9月25日
原稿採択決定日 2012年10月6日